

第60回日本小児保健協会学術集会 ワークショップ2

子どもを生き育てることが喜びとなる社会を目指して一少子化と男女共同参画—

自然体で～私のワーク・ライフ・バランス～

野 町 琢 爾 (東京地下鉄 (株))

I. ワーク・ライフ・バランスの必然

私は産院に勤務する助産師の妻をもつ、二児の父です。私自身は東京で地下鉄事業を営む東京地下鉄(株)(東京メトロ)の事務系管理職です。子どもたちは8歳と5歳の男児で、やんちゃ盛りです。

私たち夫婦は、共通の趣味を持ち、仕事を全うするだけでなく、その中で生じる種々のお付き合い・つながりを大切にするタイプです。そのような意味で、意識せずともワーク(だけでなく)・ライフ・バランスを取らないと、生活が営めない状況にあります。

ワーク・ライフ・バランス。それをもっとも意識させられたのは、「あの日」でした。

II. 2011(平成23)年3月11日 そのとき・・・

1. 東京地下鉄(株)(東京メトロ)に勤務する夫

当時、駅現業の陣頭指揮を執る部署にいた関係で、地震発生直後から復旧に向けたさまざまな動きの指揮を執る業務に従事していました。全く手探りの状況ではありましたが、多くの帰宅が困難なお客様が発生してしまっただけでなく、首都圏の帰宅の足を一刻も早く確保するため、最終的には終夜運転を実施することになりました。

その間、家族に連絡も取れないまま(というよりは取る余裕もなく、というのが正直なところですが)、業務に没頭していました。深夜になって、復旧路線が増え始めて一段落し、ようやく妻と連絡を取りましたが、子どもを含めたお互いの無事を確認しただけでした。その後も不眠不休で復旧にあたりました。

結果的に帰宅の途に就いたのは翌日夕刻でした。す

べての路線は概ね復旧し、土曜・日曜のダイヤの確保も大体見えたところでの帰宅でした。これまた偶然ではあったのですが、夜勤入りの妻と交替というタイミングでした。翌日夕刻であっても帰宅の足はなかなか完全ではなく、イライラしながら帰宅していたのですが、私の帰宅とほぼ同時に妻は出勤していきました。

2. 産院に勤務する助産師の妻

当日は、日勤勤務に従事していました。地震発生後、病院内の安全を確保したうえで、病院最寄りの同じ保育園に子どもを預けている同僚同士で保育園に子どもたちを引き取りに行きました。病院の中で、相互に保育しながら業務に従事する、というスタイルを取ったようです。その後勤務時間が終了し、無事に帰宅しました。

前述のとおり、翌日は夜勤の入りの日でした。

3. 保育園に通う2人の男児

区立の保育園で、ちょうどお昼寝が終わった直後に地震が発生しました。しかし先生方の毅然とした行動と訓練の成果により不安は感じなかったそうです。

前述のとおり、夕刻の交通機関がマヒしたため、お迎えに来られない保護者が続出しましたが、一人ひとり確実に引き渡すために、子どもたちを励ましながらかじっと待っていたそうです。最後の保護者の到着は日付が変わる頃だったようでした。

4. 感じられたこと・教訓

当日は、自分たちにとってはラッキーが重なったう

えに、特に妻と子どもたちが所属しているコミュニティがうまく機能して、それぞれの役割を全うできたことには大きな安心感を得られたと思います。

また、妻も私もですが、社会基盤となる仕事の重要性を改めて実感するとともに、私個人としては、後から考えるとワーク・ライフ・バランスへの配慮が欠けていたと痛感しております。

Ⅲ. 妻が夜勤の日の過ごし方

私たち家族が、世の一般家庭と違うのは妻の夜勤があることです。ワーク・ライフ・バランスの必要性が象徴的に表れる日ですので、少々細かいですが具体的に振り返ってみます。

1. 朝

妻の出勤が遅いので、家事分担は妻シフトです。朝の段階で妻や私から、子どもたちには今日は妻が夜勤であることを刷り込みます。

2. 日 中

妻が夕食・朝食の準備をしてくれてから出勤します。

3. 夕 刻

私が保育園にお迎えに行き帰宅します。

4. 夜

私が夕食温め・翌日の準備・入浴・洗濯をして、就寝します。最近子どもたちだけでやってくれることも増えてきて、楽になってきました。

5. 翌 朝

私が朝食準備をして、保育園に送ります。子どもたちも意識しているためか、寝起きがよかったりお手伝いをいつもより多くしてくれたり、結果的に普段より早く推移することが多く、時間的に余裕のある登園・出勤となります。

以上、簡単に一日の様子について触れました。現在では長男が小学校・学童保育となったため少しバリエーションが増えてはいますが、妻が家にいない時間の過ごし方もだいぶ慣れてきており、男3人の貴重なコミュニケーションの場にもなっています。この生活が始まった当初、1歳過ぎの幼子にとっては、母親がいない状況は頭では多少理解しつつも、受け入れがた

い辛さだったようで、なかなか寝付かないわが子を何とかしようと独り悪戦苦闘したものでした。

とにかく、子どもたちが状況を理解して自分たちで動くようにする、というのがポイントと思っています。子どもたちにとってもある意味の自立への刺激の場ともなっているように思います。

Ⅳ. 家族の生活スタイル

家庭にいる時間が短い私たちの生活スタイルについて改めて触れてみます。

1. 夫

40歳の働き盛りの事務系管理職で、基本的に月～金曜の日勤ですが、事故等の突発対応を含む仕事と、その中で生じる種々のお付き合い・つながりを大切にしているのが特徴です。実家暮らしから結婚したこともあり生活力に長けているとは言えない状況であり、また、夫婦共通の趣味の活動も相当の時間を掛けています。

2. 妻

37歳の中堅助産師で、夜勤は月に2回程度で土日祝日にも勤務があります。仕事熱心かつ種々のお付き合い・つながりも含めてもっと時間を掛けたいものの不足気味と感じていると思われれます。夫同様、趣味の活動もそれなりに時間を掛けています。

3. 長 男

8歳・小学2年生で、6年間の保育園生活を経て小学校に入学しました。放課後は学童保育に通い、独り帰宅して親の帰宅を待ちます。月に1度は土曜登校があります。

4. 次 男

5歳児で、保育園生活5年目です。延長保育でお迎えを待って帰宅しています。土曜保育のときもあります。

Ⅴ. 生活上の不満

それぞれの家庭内外のネットワークとの関わりの中で、家庭内への不満も存在しています。なかなか相手の状況にアンテナが立てきれていないというのもお互いへの不満かもしれません。

1. 夫

早朝・夜の時間帯を含めスケジュールをできるだけ空けておきたい、スケジュールを決めるにあたって、調整先が多いので家庭内のスケジュールは早く固めた一方、子どもたちと触れ合う時間ももっとほしい、苦手な分野の家事(主に食事の準備)は勘弁してほしい。

2. 妻

もっと仕事がしたい、仕事以外の付き合い・趣味ももっとやりたい、もっと家事を分担してほしい。

3. 子どもたち

家族が揃って楽しむ時間がもっとほしい。

VI. 生活上の工夫・コツ

このようなメンバーで生活を送るに際して、コツとも言えることがあるか、というと、それもなかなか見当たりません。これまでを振り返って言えることは、私自身が生活力に乏しいということを前提として、それでもできることは何とか全うする、家族それぞれが相手のワーク・ライフ・バランスに少しでもアンテナを立てて、できる配慮をする、相手の生活に敬意を払うということでしょうか。具体的には次のようなことです。

- ・スケジュールの早期決定をするように努め、譲るところは譲る
- ・自分中心が続いた時には遠慮の心を持つ
- ・できることをやる（無理してできないことはやらないし期待しない）
- ・家族が揃うときは全力で向き合う
- ・仕事の話も（可能な範囲で）家庭に持ち込んで理解を得る
- ・相手に敬意を払う
- ・子どもの友人家族を含め、お互いさまで頼れる関係性を構築する

私個人としては、強制的に「ライフ」の時間を持ったことで、仕事一辺倒の生活にはならず済んだのではないかと、思っています。子どもたちも大きくなってくると、母親のいない日というのを完全に理解し、自立性の高い生活を送っています。男3人の時間は、それはそれで特別な雰囲気でも楽しくもあり、私にとっては子どもたちの成長を直に感じるとても貴重な機会でもあります。また、地域のコミュニティへの参画という大きな意味合いもあります。

生活環境・夫婦関係は千差万別ですし、価値観や環境によって決まってくるものでしょうから、一つの事例紹介にしかならないとは思いますが、何かの参考になれば幸いです。